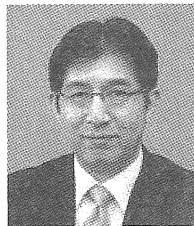


第五回

教育相談の「心」(四)
勇気づけで子どもとばくむ

会沢 信彦

文教大学教育学部准教授

前号では、アドラー心理学に基づいた、「子どもの不適切な行動には目的がある」とする考え方を述べた。

言うまでもなく、児童生徒への支援（いわゆる生徒指導）の第一歩は、的確な児童生徒理解である。しかし、理解しただけでは支援につながらないのもまた事実である。では、子どもの不適切な行動に対して、私たちはどのような支援を行うべきなのであるか。今号でももう一度、アドラー心理学の立場から検討することとしたい。

一 生徒指導の大前提

アドラー心理学では、生徒指導の大前提は、児童生徒と教師との良好な人間関係であると考える。

私たちもそうであったように、子どもが教師の指導に従おうと思うのは、その教師との間に信頼関係があるからである。逆に、

特に小学校高学年以上ともなると、信頼関係を築けていない教師の指導には、それがどんなに正しい指導であっても従おうとは思わないものである。

子どもが「あの先生は自分のことをよく理解してくれている」と感じるような平時の人間関係こそが、有事の際に生きてくるのである。

二 子どもが罰から学ぶもの

アドラー心理学では、ルールに基づかない教師の恣意的な罰を、ことのほか戒める。それは次のような理由からである。

まず、罰によつて「何をすべきでないか」は学べても、「何をすべきか」は学べないからである。さらに、罰は子どもと教師との間の良好な人間関係を破壊するからである。

そして、何よりも恐ろしいのは、子どもが「他者が望ましくない行動を取った時に

は、力のある者が恣意的に罰を与えてもいいのだ」と学ぶからである。

三 不適切な行動に対する支援のセオリー
アドラー心理学では、不適切な行動の四つの目的ごとに、以下のような支援のセオリーを提唱している。

(一) 注目・関心

教師の注目・関心を引くことで所属欲求を満たそうとする子どもの不適切な行動に對して、多くの教師は注意したり叱ったりする。しかし、それはまさにその行動に注目・関心を与えることになる。すると子どもは、「やっぱり人とは違う特別なことをすれば教師の注目・関心を引くことができるのだな」と学ぶことになる。

しかし、教師がその子に送らなければならないメッセージは、「君はそんな特別なことをしなくても、ただ存在しているだけで大切な存在だし、ここに居場所があるんだよ」というメッセージである。そのためには、教師は不適切な行動に注目するよりも、適切な行動、つまりふだんの行動こそを勇気づける（後述）ことが重要となる。

(二) 権力闘争

「自分が教師より強ければ所属欲求が満たされるだろう」と考えて教師と権力争いをする子どもに対して、教師は勝っても負けてもいけない。教師が勝てば子どもはさらなる争いを仕掛けるであろうし、かと言って教師が負ければ子どもの誤った認識を強めることになるからである。

したがって、教師の取るべき正しい選択肢は、争いの土俵から降りることである。そして、「注目・関心」の時と同様、ふだんの行動をこそ勇気づけることである。

(三) 復讐

「教師に復讐することで所属欲求が満たされるだろう」と考えるこの段階は、子どもの認識はかなりゆがんでおり、同時に子どもと教師の関係はかなり険悪になっているはずである。

ここで教師は、ゆめゆめ「目には目を」などと考えるてはならない。子どもはそれだけ傷ついていると考え、教師は傷ついてもぐっと我慢である。そして、やはり少しでも子どものふだんの行動を勇気づけることが求められる。その際、その子どもと関係の切れていない第三者（例えば部活の顧問

など）の助けも必要になるであろう。

(四) 無気力・無能力の誇示

「自分が無気力・無能力であることを示すことで所属欲求が満たされるだろう」と考える、もつとも重篤な段階である。

このような子どもを見ると教師はついさじを投げたくなるが、教師が諦めたらおしまいである。ネバー・ギブ・アップの精神で、この段階こそ、子どものどんな些細な行動であっても勇気づけることである。

四 勇気づけとは

このように、アドラー心理学で提唱する不適切な行動に対する支援のセオリーは、「不適切な行動に注目するよりも、適切な行動を勇気づける」である。

ドライカースは、「植物が太陽と水を必要としているように、子どもは勇気づけを必要としている。しかるに、不幸にもつとも勇気づけの必要な子どもが最小のものしか得ていない」と述べている。「もつとも勇気づけの必要な子ども」、それは問題行動を起こす子どもである。

アドラー心理学では、勇気づけとほめることとは必ずしもイコールではないと考え

る。ほめることはしばしば上から下へのメッセージであるのに対して、勇気づけはアドラー心理学が目指すところの対等な人間関係が前提となっている。

わが国における勇気づけ研究の第一人者である岩井俊憲氏は、「勇気づけの技術」として次の七点を挙げている。

- ① 加点主義（↑↓減点主義）
- ② ヨイ出し（↑↓ダメ出し）
- ③ プロセス重視（↑↓結果重視）
- ④ 協力原理（↑↓競争原理）
- ⑤ 人格重視（↑↓人格軽視）
- ⑥ 聴き上手（↑↓聞き下手）
- ⑦ 失敗の受容（↑↓失敗を非難）

アドラー心理学では、問題を起こす子どもは、「勇気をくじかれた」子どもであると考える。読者の学校では、「勇気をくじかれた」子ども（不登校、いじめ・いじめられ、非行……）は存在しないだろうか。いまこそ、勇気づけを中核に据えた生徒指導が求められている。

〈参考文献〉

岩井俊憲『勇気づけの心理学』金子書房